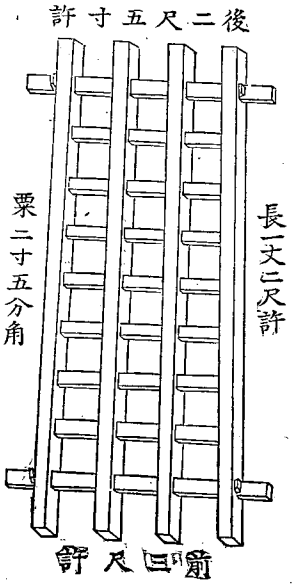
前一ト云心也、

〔齊東俗談一典故〕修羅　佛經、阿修羅天、帝釋ト權ヲ爭テ、修羅負トキハ、手ニ日月ヲ捉テ、藕絲孔中ニカクレ、帝釋負トキハ、天宮十三重ノ網中ニカクルヽ等ノ說アリ、天台文句疏記幷名義集ニミヘタリ、俗石引車ヲ修羅ト云、大石、帝釋、音相似タリ、阿修羅、帝釋ヲ動ス義ヲトレリ、

〔安齋隨筆前編十四〕一修羅車　節用集に、修羅註云引大木材木也、軍器考に、大友が家の事を記せる所に、○中略檜村長高が、室町殿日記卷二十、小天狗篇中、大佛殿造營の事を云へる章に云、石垣の大石を鹿が谷より引れたるに、蒲生飛驛守○氏郷承りて、六疊敷の大石を引に、三千五百人にて引けりと聞ゆ、楠木松の虹梁をもつて、修羅車を造り、是に引のせ、道筋には丸太を敷て、其上にアラメをまかせて、ヌメリをもつてやりにける云々、今世地車と云物の大なる歟、

〔梅園日記四〕修羅

愼言、先年靈巖島の伊豆屋といへる石肆にて、修羅と稱する器を見たり、其圖左の如し、又北越雪譜に、雪車の制作種々あり、大なるを修羅といふとあり、又江戸に修羅船といふ船あり、積たる物を船底までいれじとて、小べりといふ所の高さとひとしく、板を敷ならべたる造りかたなり、

修羅の圖石肆所貯